

今回は、日本経済新聞の記事から～日本病、長期停滞の足音～を紹介します。

日本が剣が峰に立っている。デフレ、株安、円高、高失業率、所得減……。経済だけではない。新政権の政策のブレやふらつき、新興国台頭による国際的地位の一段の低下、人心荒廃を映すかのような異常な殺人や薬物乱用など社会的事件の増加……。これだけ悪いことが多方面で同時に起きれば、日本が1つの文明国家として大きな曲がり角を迎えていると感じざるを得ない。

経済の病は深刻だ。内閣府が先に発表した2009年7～9月期の国内総生産(GDP)は、物価下落の影響を加えた名目で前期比年率0.3%のマイナス。これを年換算の実額に置き換えると名目GDPは479兆円となり、17年半前の水準に逆戻りする。デフレの怖さを示す数字だ。

リスクマネーは成長力の弱まった国から足を遠ざける。世界経済危機のあった昨年末から直近までの株価の動きを主要市場別に見ると、日経平均の上昇率は1ケタ台にとどまる。7割以上の上昇を示した中国、インド市場はともかく、英米独の先進国市場も2割近く上がった。回復局面での日本市場の置いてきぼり状態は鮮明だ。

そこへの急激な円高だからたまらない。企業は業績回復の出ばなをくじかれた格好で、デフレ、株安、円高の三重苦が重くのしかかる。大手自動車メーカーのトップは「政府が有効な円高対策を打ち出せないようなら、今度こそ生産の海外本格移転を考えなくてはならない」と顔を曇らせる。需要不足は年40兆円。物価下落と景気悪化が同時進行するデフレスパイラルはすぐそこまで迫っている。

国家経済の長期にわたる衰退・停滞を表す20世紀の言葉に英国病とオランダ病がある。世界有数の債権国、福祉国家でありながら国民の勤労意欲の低下や財政悪化から不況を克服できず、資本の国外流出を招いたのが英国病。通貨(為替レート)と生産コストがともに上昇し製造業の国際競争力が低下、一方で過去の成長期に膨張した社会保障費が財政を圧迫し続け経済停滞を長引かせたのがオランダ病。いずれも犯罪増など社会不安を生んだ。

多くは今の日本にそのまま当てはまる。日本は根っこにデフレ、人口減という成長の二大阻害要因があり、より深刻ともいえる。今ここで政・官・民が再生への意識と力を合わせないと、後に日本病と呼ばれるような長期停滞に陥りかねない。

設問 1 業績回復の出ばなをくじかれた企業の3重苦とは？

() () ()

設問 2 デフレスパイラルとは？

()

設問 3. 英国病とは？

()

設問 4. オランダ病とは？

()

設問 5. 日本の抱える成長の二大阻害要因とは？

() ()

